

町小だより

令和6年
2月28日
No. 683
御免町小学校

自分ができること

校長 相澤 祐助

思い返すと、私の祖父は、食事の時は「でん」と座って、黙々と食べて、飲んでいました。準備も片付けもしません。誰がするのかと言えば、母や祖母です。子どもながらに、私はずっと違和感をもっていました。なぜ、男は・・・、どうして女性ばかり・・・、と悶々としていました。「じいちゃんも手伝えば!」と思っていました。

しかし、そんな祖父ですが、案外マメで、おもしろい人でした。戦争から新潟に戻った後は、ほとんど、居間に座って、煙管(キセル)で煙草を吸うか、お茶を飲んで、近所のおじちゃんと話をしていました。もともと体が弱く、農作業や畑仕事はしません。たまに、市場に買い物に行き、筋子やサンマのみりん干しを買ってきて、私たちに食べさせてくれました。そんな祖父が私に命じたことは、「ニワトリの世話」でした。小学校に入学すると、「祐助、これからはお前がこのニワトリを育てろ」というのです。

毎朝夕、水と餌をあげます。親鳥が12羽、ヒヨコが20羽ほどいました。卵もけっこう産んでくれたので、新鮮な卵を食べるのが楽しみにもなりました。産みたての卵を取る時がつらくて、心が痛みます。しかし、ヒヨコが大きくなって、親鳥の仲間入りをすると、育てた甲斐があるなあと自分で満足していました。

ある時、「祐助、毎日、ありがとう。お前のおかげで助かっているわや」と普段あまり口を開かない祖父が、私に感謝の言葉を伝えてくれました。その後、祖父は脳溢血を患い、入退院の生活を繰り返しました。そして、私が中1の夏、65歳で他界しました。祖父の死を境に、父と相談し、ニワトリの飼育をやめました。

この私が、祖父から仕事を任され、見守られ、感謝されるという経験が、今の自分に大きな影響を与えていると思っています。小学生の私を信じ、任せ、認めてくれたこと、これは何物にも代えがたい出来事です。

今、核家族が非常に多く、親の働き方が多様化しています。また、生活が便利になり、リビングを眺めると、個々にスマホを持ちながら、個々にその画面を注視している、そんな光景はないでしょうか。便利さが人間の関係性を希薄にしかねない状況が起こりつつあります。しかし、家族の一員として、ご飯の準備や片付け、家の掃除、風呂の掃除や準備、ゴミ出しなど、子どもでもできる大切な仕事はあると思います。信じて、任せて、見守り、ほめて、認めることがとても大切です。その過程には必ず、失敗や困難もあります。そこを親子、家族でコミュニケーションを重ねながら乗り越えた先に、子どもの成長があると私は信じています。つつい手を差し伸べたり、転ばぬ先の杖を出したりしたくなります。そこをぐっところえて我慢することで子どもは大きく伸びるのでしょう。学校でも、各学級や隣接学年、学校行事等で関係性を大切にしながら、自分を高めるための「挑戦する」学びが徐々に戻ってきています。

令和5年度もあと1か月を切りました。「自分ができるようになったこと」を振り返り、次年度のステップにつなげてほしいと願っています。